

## 幕末明治の写真師列伝 第六十回 内田九一 その二十五

この頃の内田九一についての逸話としては、九一が幼少の頃より亡くなるまで大変お世話になった松本良順が、明治3年(1870)今の早稲田の地に早稲田蘭學院を開設する際に、松本家の食客であった紀州藩士山東直砥(注1)との間の金銭トラブルの逸話がある。

明治2年(1869)に松本の妻、登喜子がこの山東直砥に千両の金の保管を依頼し、後明治3年7月5日まで、暫時、松本良順がこの千両の金の返還を求めているのだが、山東直砥が千両中の残金350円の返還に応ぜず、その残金の返済を求めて明治10年に裁判となった。この裁判の記録に内田九一が、松本良順と山東直砥との間の仲に入って斡旋していたが失敗に終わった旨が横浜裁判所への訴状に「(前略)先年内田九一ヲ以テ回復之事ニ立至(後略)」と記載されている。(注2)

明治5年(1872)に来日して銃や弾薬製造面で技術指導したフランス人、ジョルジュ・ルボン大尉(注3)の写真が「東京大学史料編纂所研究紀要」第9号に掲載されている。この写真は「兵器技術教育百年史」の写真説明によると、「ルボン大尉 明治8年内田寫眞師(浅草馬道)が横浜で撮影」とあるが、唐草模様の腰板、龍紋円柱飾台、洋風椅子、絨毯柄を見ると、内田九一の浅草大代地の写真館で撮影されたことが判る。ルボン大尉は明治8年(1875)8月から11月まで賜暇帰国しており、その際に「一八七五年LEBON」と署名してパリの知人に渡していることから、この写真は明治8年(1875)8月までに、内田九一あるいはその弟子などに撮影された写真であることがこれで判る。

『東京日日新聞』明治8年(1875)2月18日、「寫眞師内田九一歿す」の記事には、「雜報 ○有名なる寫眞師内田九一氏は、昨十七日の曉きに病死したり、行年三十二。明十九日王子堀の内村郷戸松本順君の抱え屋敷内の墓地に埋葬する積りの由なり。此九一氏は長崎の出生にて、幼くして父母に離れ、伯父吉雄斎者と云ふ医者の手で養われて人と成り、弱冠の頃より寫眞の道に志ざし、維新以来は追々と繁昌し、遂に主上の竜影をも其手にて写し奉り、其業に工なる、遍ねく人の知る所なり。その人と為りや廉直洒落の性質にて、交わるには信切を旨とし、世間同業の寫眞師にも力を添へ、助けを成したる事少なからず。数年来肺病に罹りて、吐血する既に四五度に及び、昨冬このかたは愈々肺労と成りたり。己れも兼て其早世すべきを悟り、門人中にて技術に工なるもの二人を選び、其業を嗣がしむるの策を定めたれば、宮内省の御用を初めとし、一切の事ども九一氏の病中も更に差支なし。故に此後とても此兩人にて、先師の名を落さぬ様に繁昌するに疑ひなし。併し九一氏ほどの勉強して、一家を建て一業を開きさる人を、壮年にて死なしめしは、惜むべきの至りなり。」とある。

『月乃鏡』では内田九一が亡くなったのは明治9年(1876)としているが、これは誤りで、この新聞記事から、「有名なる寫眞師内田九一氏は、昨十七日の曉きに病死したり、行年三十二」というのが正しい。このことは明治8年(1875)2月19日の『読売新聞』の記事にも「寫眞師の内田九一先生は久々病氣にて今月十七日に死なれました」とあり、これが内田九一の亡くなった日時として確定事実であることが判る。

内田九一は駿河台紅梅町に、西洋風の豪華な写真館兼邸宅(300坪)を新築するのだが、ここに引っ越しをする2日前に亡くなっている。このことはこの洋館が売りに出されていることを林研海からの手紙で知った榎本武揚が、この洋館の様子について書いた明治10年(1877)1月11日付の手紙が残されていることから確認できる。この手紙の内容によれば、この洋館は今の御茶ノ水駅の西側改札付近にあったようである。

内田九一は明治8年(1875)2月17日曉きに、その才能を惜しまれ

ながら32歳の若さで肺病のため死去した。数年来、肺病にかかり吐血することも度々であったという。おそらく2月17日通夜、18日葬儀が行われたのであろう。そして2月19日、王子大字堀の内字郷戸(ごうと)、松本順(良順)の抱え屋敷内の松本家代々の墓地内に埋葬された。

この松本順(良順)の抱え屋敷があった場所は、『蘭学全盛時代と蘭学の生涯』によると、「この江戸脱出の時良順は家族の者を松本累代の墳墓のある府下王子梶原村(今の王子製紙会社のある処)に移した」と書かれているが、しかし、この「(今の王子製紙会社のある処)」の部分は正確には間違いのようだ。

『順天堂史』によると、明治5年(1872)4月10日に、松本順(良順)の実父である佐藤泰然が、肺炎にて下谷茅町にて逝去した際に、葬儀が神式で行われ、初め王子堀之内にある松本家の墓地につくられたという。これはまだその当時、松本順(良順)の養父松本良甫が現存している、佐藤泰然と若い時から親友で、死後も離れぬ約束をしていたからだという。その後、松本良甫の方は、明治14年(1881)11月に亡くなり、同じくこの佐藤泰然の墓の隣に葬られた。現在両者の墓は後に改葬されて、谷中墓地の同じ佐藤家の墓域の一隅に移されている。この松本順(良順)の抱え屋敷というのは、当時の行政区分でいうと北豊島郡王子大字堀の内字郷戸というところにあつたようである。この場所は『松本家家譜』によれば、明治維新直前に松本順(良順)の妹タツの里親だった堀江松五郎の屋敷を購入したとあることから、現在の堀船1丁目3番地6号堀江隆氏宅の敷地内にあつたと思われる。

注1：紀州藩士山東直砥

「志士、三栗と號す紀伊の人、初め高野山の僧侶たり一朝感ずる所あり播州に抵り河野鐵兜の門に学ぶ去て大阪に赴き松本奎堂、松村飯山、岡鹿門の共立せる雙松岡塾に入り苦学し後北海道に航し函館に於て露語を学び又長崎、京都の間に往来して樺太開拓の急を論ず維新の初め開拓判官と為り辞職の後東京に来り北門義塾を開き子弟を養成す十年の後陸奥宗光の謀に與みしとさ派と応呼して政府を顛覆せんとして果さず纔かに罪を免る嘗て癩癩を病み失神して火爐に陥り顔面を焦爛す耶蘇教を信じて市に隠れて病て歿す直砥詩書を善くし一家を成すに足る晩年病の為に落莫甚だ振はず同人の惜む所と為る」(大日本人名辞書刊行会『大日本人名辞書(第二卷)』(講談社、明治十九年四月十五日)より)

天保11年(1840)、和歌山城下に生れる。通称一郎。後、直砥と改める。号三栗。箱館に赴き司教ニコライにロシア語を学び、隅岡本監輔と相識つてともに北門社を結ぶ。明治元年(1868)、箱館裁判所判事となる。後、出版・牛乳販売業・印刷業・ホテル経営・教育家等、毎に文化の先駆を志したが、明治37年(1904)2月14日、東京麻布の自邸に歿した。年65。(吉田武三『北方人物誌 蝦夷から北海道へ』(北海道新聞社、一九七六年)所収、「山東直砥」小伝より)

注2：鈴木要吾著『蘭学全盛時代と蘭学の生涯』(大空社、昭和8年)P156~157参照。

注3：ジョルジュ・ルボン大尉の写真『東京大学史料編纂所研究紀要』第9号に掲載写真。

ジョルジュ・ルボン大尉は、明治初年のフランスの軍事顧問で、東京砲兵工廠の建物や加工機械の設計図を作り、基礎を完成させた。

(森重和雄)